

# 最凶魔術師の

「小説」  
ピンク色伯爵

## 異常なる逃亡生活

「イラスト」  
ジョンディー

VOI I ME



試し読み版

I プロローグ	006
II 追手	011
III 性奴隷契約	029
IV 救出作戦 (偽)	051
V 高くついた代償	068
VI 異界からの使者 I	085
VII 黄昏の森へ	103
VIII 異界からの使者 II	120
IX 異界からの使者 III	146
X しじまの性愛	162
XI エピローグ	187

I プロローグ	198
II 『青』の誘い I	208
III 施術	224
IV 不死者の迷宮 (受付)	241
V 帝都アイボリーポリス	260
VI 彼のことを知りたい	278
VII 『青』の誘い II	301
VIII 肛虐の夜	319
IX 『青』の誘い III	339
X 封龍解放	360
XI 地底からの強襲者	377
XII エピローグ	392



シルヴァルウィ・  
カリナリエンの章

## プロローグ

暗い洞窟に淫らな水音が響く。

「んちゅ……、ちゅ……、ちゅ……、じゅ……」

断続的に続くそれは、お世辞にも劣情をそそるものであるとはいえなかった。

熟練の「戦士」ならば、奉仕する側が嫌々していることがすぐに分かるであろう、やる気のないフェラチオの音。

唾の量が足りず、舌の使い方もおざなりで、唇の締め付けもなみに等しい。

「ちゅ……、ちゅ……、ちゅ……」

闇の奥——洞窟の中ほどにある巨岩には、座した一組の男女の影があった。

岩に背を預ける男と彼の股間に口を付ける女の影だ。

男はポロ布のようなローブを纏まとっていた。右肩の部分は大きく裂けており、左肩と腰まわりでどうにか衣服としての役割を保っている。人里外れた森の奥に相

応しく、蛮人のような格好である。

女は普通の村娘のようだ。

服をすべて剥かれ、脇わきに捨て置かれている。

彼女の金の髪は解かれていた。

歳はなかなか若い、特に見た目が美しいわけではない。

体は首の辺りや腕まわりがほっそりしている一方で、腹まわりや腿の肉がだらしなくたるんでいる。

折り曲げた腹には二段の脂肪の隆起ができていた。

肌の色は不健康そうな青白い色で、脇や陰部には金色の恥毛がびっしりと生えていた。

口を動かしているが、目は虚ろで反応も鈍い。

彼女が魔術で操られているのは一目瞭然だった。

「ちゅ。やはり素材がよくないか」

闇の中で苛立たしげな男の声が響く。

声は若い。

張りのあるテノールで、どこか音楽的な美しさがあつた。

「緊急事態ゆえ、対象を選ばなかったのは仕方ないが、

それにしても偶々たまたま近くにあつた個体がこれだつたとは——いや、このような趣向の女で遊ぶのも好きではあるが、ともかく今は一番引いてはいけないカードだつた」

男はブツブツと独り言を言っている。もしかしくなても人と話すのが苦手な人種——この男を分類するのなら、これに入るに違いない。

彼は自分の考えをまとめるように言葉を重ねていく。「しかも連れ去つただけで失神するとは思つてもいなかった。意識があればレイプするくらいの楽しみはあつたのだが……。しかし嘆いたところでどうにもならない。魔力も回復していないが、仕方あるまい」

そう言つて男は、ぐつと身を起こす。洞窟内に忍び入つてきた月光がわずかに男の顔と体を照らし出した。

とび色の髪に若々しいライトブルーの瞳。

あまり整つた顔立ちではなかつたが、見るに堪えないほど醜悪というわけでもない。

せいぜい中の下くらいの凡庸な顔である。若くせいかん精悍

な印象があるから相手を選ばない女子なら彼でどうか満足するかもしれない。つまりはその程度である。

反面、体は鍛え上げられ引き締まつていた。腹の辺りは女のものとは比べるのもおこがましいくらい筋肉の形が透けて見えていた。

がっしりとした青年の両腕が脂肪にたるんだ女性の腹を掴む。

そのまま仰向けに転がし、続いて柔らかい太腿の内側に手を当てて割り開いた。

むあつとした湯気が上がる。

女は興奮しているようだ。

手入れもろくにされていない毛は、サーモンピンクのクレパスから溢れる蜜に濡れて妖しく光っている。

毛は尻の穴まで続いていて、鼻を近づけると、つんとくる尿の香りがした。

割れ目ははしたなく開いてひくひくと蠢いている。覗き込んで観察する青年の息に触れ、小陰唇がびくりと震えた。その上の——青年から見れば下であるが——肉の芽は既に包皮からわずかに露出していた。

「服に隠され目に見えないところはそれなりにいいものだったが、服の下は度しがたいほどに醜悪だな。

——んちゅっ」

膣口に吸い付く。

びくりと女の体が跳ねた。

それを上から押さえつけながら青年は太腿を掴む手に力を込める。

尻から垂れ下がるような肉が指の間から漏れて、むにむにと形を変ええる。

女は刺激のあまりしゃぶるのをやめたようだ。

意識のない彼女は青年の魔術によって動かされているが、それに抗うほどの快感だったらしい。

クリトリスを廻られ小陰唇を甘噛みされ、陰茎を口に突っ込まれた女はびくびくと蛙のように震え続ける。

やがて陰茎は涎とともに吐き出され、女の若々しい唇からは、か細い息遣いだけが響くようになった。

「はあ——、はあ——、はっ——」

女は頬を上気させ息を乱し続ける。

腹まわりや性器まわりの様子から怠惰で手淫漬けの

生活を送ってきたのは明らか。この女が妄想をすればさぞかしいやらしいモノを脳裏に浮かべるに違いない。

「ぶはっ。——性魔術、起動。【淫夢】」

男の声に女の額が淡く桃色に発光する。

すると途端にM字に開脚された股座から愛液が迸った。

ピユッ、ピユッ、ピチャ……。そんな音がした。

「あっ……、あ……、はあっ……」

艶っぽい息遣いの女。

彼女の呼吸に合わせるように膣全体を撫でさするように男の手が動き始める。

手の平でクリトリスや外陰部を大きく摩擦していく。剛毛の生える恥骨の上部から当てて、尻の穴まで。

手が戻ってくるときは、人差し指と中指を折り曲げて尻の穴と膣の穴を深くゆつくりと抉ってやる。

又チュウ……、又チュウツ……、と粘っこい水音が

繰り返される。

「あっ、あっ、あっ……。ぶぐ!! じゅ、じゅぼ、じゅ

ゅぼぼぼ!!」

剛直が女の口に刺さる。溢れた涎が突き出された舌とともにいやらしく肉棒に這い、彼女の眠れる欲望を増大させていく。

「んちゅ、じゅ、じゅぼつ、ずずッ!　じゅぼぼぼぼつ!　レロオ……、んぶう、じゅぼつ、ちゅつじゅぼ、じゅ、じゅ、はふ、じゅぼぼぼぼぼぼぼぼつ!」

貪欲な女の唇。

青年はわずかに顔をしかめながら女の割り開かれた膣に吸い付く。

シックスナイン。

男が上に乗る、女が下の少し変則的な型だ。

快感に震える汚い女体を上から押さえつけながら、青年は右手で女の腹の肉を揉みしだき、蜜壺を太い舌で抉って艶る。女も蛸のように陰茎に吸い付いて下品に我慢汁を吸っていた。

女の震えがだんだん大きくなる。

男はクリトリスに吸い付き、両手の指で小陰唇や尻穴を細かく刺激し始める。

「じゅぼつ!!　あ、あ、あ、あ!　あ、あつ!　あつ!」  
鴨のように高い声。

「あつ、あつ、あひっ?!　い、いつ、ああ!　あああつ!」

ガリ、とクリトリスに歯を立てる。

「あ♥」

女の声が濁った。

太腿のたるんだ肉がびくりと震える。

ピンクの膣肉がきゅつと縮まり、

「あああああああああああああああ!……!……!」

勢いよく、クリトリスの下の穴から透明な液を噴き出した。

ジョボボボボと大きな音を立てながら温かい潮は入り、洞窟の岩の床にビチャビチャと跳ねる。

女の痙攣は続く。

青年の力強い体に抱きしめられ、出鱈目でたらめに跳ねることも許されず、青白い肌を揺らして快感の波を外に逃がしている様子だ。

やがて大きな筋肉の動きがなくなるところで、青

年は女を解放した。

彼女は大股開きのまま白目を剥いてびくつ、びくと震えた。

窟穴は空気を貪るように開閉を繰り返している。

「ふん、淫らな夢は楽しめたか、女」

男は冷たく吐き捨てる。女を視界から外した。

魔力もなく、体の鍛えも足りない。

足手まとい以外の何物でもない。

「時間の無駄だった」

男は駆け出す。

洞窟を出て、闇に包まれた草木のうっそうと生い茂

る森へ。

月光は届かない。

逃亡者に月の女神の加護はあり得ないからだ。

彼は逃げる。

一目散に逃げる。

やがて限界が来るだろうが、それまでに森の奥へと

ひた走る。

彼は逃亡者だった。

国を捨て、仲間を捨て、男——アール・ダーククラッ  
トは、逃げる。

薄汚れた魔術師のローブを手で押さえ、ただひたす  
らに。

## 追手

次の日、アールが目覚めたのは森の開けた広場だった。

どこかから鳴禽類めいしんれいの高いさえずりが聞こえてきている。

視線を左右に振るとドングリや枯葉の散る腐葉土。広場を囲うように乱雑に生い茂るのはブナやカシの木だ。

幹の細いものがほとんどだが、中には樹齡千年にもなりそうな巨大なものもある。

全長数十メートル。

鳥の鳴き声はそのでっぺん、緑の葉が生い茂る上から聞こえてきているようだった。

鼻を動かすと、わずかに栗の花に似た臭いを感じられた。精液の臭いでなければ、ドングリの香りかもしれない。

もう日は高く、影は真下に落ちている。

記憶が曖昧だが、どうやら昨晩はこの広場まで辿りつき、ここで体力の限界が来て大の字に倒れてしまったらしい。

せめて寝るなら木の上にすべきだったと後悔する。

こんな身を隠すことのできない広場に寝ていては魔獣に襲われても文句は言えない。

慌てて体を起こそうとして背中に激痛が走った。

背中に触れていた地面を見ると、草に赤茶けた血がこびりついていた。

何度か魔術が切れて背中の斬られた傷から出血したようだ。痛覚無視の性魔術を自身に使っていたことが裏目に出たらしい。

血が足りない。

腹も減った。

ぐうううと間の抜けた音が鳴る。

「天才ともてはやされたこの僕が、空腹に喘ぐあえ日が来るとは、な」

情けない。

誇りもプライドも粉々だ。

しかし、命が助かっただけましと言うべきか。

このままでは遠くから死体になるだろうが。

魔力があれば性魔術でローションを出して喉を潤すところなのだが、すつからかんの今ではそれも叶わない。

昨日の女から奪った生命力——魔力は傷をふさぎ続けるのだけになつてしまった。

相手が一般人だったから仕方がないと言えば仕方がないが、それにしてももう少し回復できる魔力袋であつてほしかった。

これでは娘を攫さらつただけ損である。

「む——」

ふと、アールはびくりと耳を動かした。

気配——というか、草の揺れる音の中に、わずかに鉄の擦れる音を聞いたのである。

本当にわずかだが、鍛えられた青年の聴覚はその音を逃さない。

森の浅層から何者かがこちらへやってくる音がする。

「まずいな。かなり近い」

眩くや否や、アールは立ち上がり広場を横切り木々の間に分け入った。昨夜よりさらにポロポロになったローブの端を手早く括くくつて肩にかける。

「王国からの追跡者か。いや、ここは既に帝国領内だ。逃走経路は気取げどられていないはずだし、暗中模索の状態で敵対勢力の国境を越えて追跡してくるとは思えない。しかし後先考えぬ馬鹿なら勘だけで飛び込んでくる可能性もあるか」

木の枝を折つて前へ前へと進む。

手を当てた大木の幹はアールの肩辺りまでの皮が剥がされ、橙色の肌が露出している。

革製品のなめし用に採取されたのかもしれない。

とすると、どうやらここはまだぎりぎり村の管理区域のようだ。

高所の樹皮が剥がされていないのは、村に若者が少ないせいだろうか。

管理区域なら追手も道を探しやすかるう。

これはいよいよまずいかもしれない。

苔むしたブナの倒木を跨いで奥へと進む。

細かい枝や葉、蕨が絡みついて鬱陶しい。

——今の状態で彼らと戦うのは自殺行為だ。

出会えば戦鬪にすらならず惨殺される。

連中が痕跡を見逃してくれたらいいが、あいにく、

ここに来るまで大量のヒントをばら撒きすぎている。

村で女を攫い洞窟でレイプして放置。森の中を荒ら

しながら移動して、広場に血痕を残しているというお

まけつき。

これではそこの狩人でも、あとを追うことは容易

いだろう。

「うっ——」

足が止まる。

大きな木の枝を払いのけた先は、一気に視界が開け、

緑の丘とその向こうに青い空が広がっていた。

緩やかな傾斜の丘には続きがないように思える。

まさか、切り立った崖があるのではないか——アー

ルは舌打ちしながらも丘を早足で上っていく。

すると案の定、丘は途中からなくなり、先は急な崖

になっているようだった。

高さ的には、性魔術で生み出した亀甲縛り用のロー

プを使えば崖を伝って下りられなくもなさそう。

しかし不運なことに、崖の途中にはビツク・モスキ

ートの巣があった。

この魔獣は百五十センチほどの大きな蚊のような虫

で、主食は生物の生肉。今は新年から数えて五番目の

月だから、ちょうど繁殖の時期に当たる。非常に危険

だ。

ロープを捨てていなくてよかった。奴らは血の臭い

に敏感だから。

ロープは臭い漏れを防ぐ魔法繊維で作ってあるのだ。

こいつを着ていなかったら、今ごろ集団でたかられ、

麻痺毒を針から流し込まれて卵の苗床にされていたと

ころだ。

気付かれないようにそつとその場を離れる。

しかし——、これでいよいよ逃げ道がなくなった。

行き止まりゆえ、少し引き返さなければならぬ。

追跡者と鉢合わせになる可能性が非常に高い。

「というか、聞こえてくる鉄の音の大きさからもう間近にまで迫ってきている。」

「……僕は王国一の天才。できないことはない。焦るな。焦らなければ必ず乗り切れる」

青年は深呼吸すると、そう言って自己暗示をかけるのだった。

※ ※

「リリナ、こつちに人が通った跡があるよ」

肩までの金髪を揺らし、緑色の軽装の少女は後ろを振り返った。

金糸のような髪は、側頭部の一部分だけ三つ編みに結われ、あとは木々の合間を吹き抜ける風にさらさらと宙を泳いでいる。

その髪の左右には尖った耳の先がびよっこりと露出していた。

エルフだ。

彼女は獣道に横たわった大木に足をかける。

膝上までの緑のスカート——エルフの女性の伝統的な狩猟着——から細く健康的な足が太腿の裏までむっちりと露わになる。

「血痕のあつた広場から一目散にここを通ったということかしら。シルウィ姉」

対して答えたのは黒髪を紫色のリボンでサイドテールに結わえた少女である。

黒髪は純粋な黒色ではなく、光の加減によって青い光が透けている。烏の濡れ羽——というのが正確な表現であろう。こちらの少女の髪は毛先が緩やかにウェーブしていた。

服装は着物と呼ばれる東方の伝統衣装を動きやすいように改造したものだ。

着物は薄紫色。胸や手首、腰まわりなどは鉄のプレートが覆っている。こちらも急所だけをカバーした軽装だ。腰には和装に似合わないロングソードが差してあつた。

シルウィと呼ばれたエルフの少女が一つ頷く。

「たぶん。でも移動速度が女性一人を担いで逃げてい

るとは思えないほど速い……。もしかしたら村長さんの娘さん、もう殺されて捨てられているのかも」

そう言ってエルフの美しい顔を歪ませる。

細い金の眉、アーモンド形の優しげな目、通った鼻筋に柔らかな唇——年のころは十代後半といったところか。

人の死に対してまだ慣れないように見える。

「だとしても、せめて仇を取らないといけないわ。下手人しゅじんには自分がしたことをしつかり反省しながら死んでもらう」

生真面目にそう返す黒髪の少女——リリナ。

白磁のような肌に、整えられた少し濃い眉、つり目がちの大きな目には、意志の強そうな黒目が光り輝いている。鼻梁も高く、唇は薄いが艶めかしい桜色をしている。東方の人を思わせる顔立ちだが、それを逸脱した魔性の美貌を感じさせる。人間にあらざる——なにか上位のモノの色香である。

ただ、成人したてなのか、近寄るだけでフェロモンが匂うような体つきではなく、熟れる前の青い果実を

思わせる胸や腰をしていた。

「そだね。——足跡もだんだん新しくなってきた。私たちの初クエストも終盤に差しかかったってとか」

「気負うことはないわよ。私たちは村で一番の使い手だった。普通にやればそこの賊程度は何人来ようとの数の数じゃないわ」

「リリナは落ち着いているね。シルウイお姉ちゃん  
は立っ瀬がありません……。昔はなにをするにも私  
あとを雛鳥みたいによちよちと付いてきてたのに、今  
はもうこんな漂々しくなつて。ちよつと寂しいよ」  
よよよ、と泣き崩れる真似をするシルウイに、リリ  
ナは鬱陶しそうな視線を送った。

「シルウイ姉、私もう成人しているのよ。そんな何年  
も前のことを毎回毎回掘り返さないで。恥ずかしいし  
面倒くさい」

「……なんか最近リリナは私に冷たいよね」

「えいっ」

シルウィは弾みをつけてリリナに抱きついた。リリナは豊富な胸に顔を圧迫され、「きゃあ」と年相応に可愛らしい声を上げる。

「し、シルウィ姉、なんなのよ!」

「んー? んふふふふー」

シルウィはリリナの抗議も意に介さず、華奢な体を優しく抱きしめる。リリナの体は震えていたのだ。ゆつたりとした着物のせいで分からなかったけれども、彼女もシルウィ同様初めてのクエストに緊張していたらしい。

——頭がよくてしっかりした子だけど、やっぱりリリナはリリナだ。

シルウィはくしやりと艶やかな黒髪を撫でながらそう思う。

「シルウィ姉、は、離して——」

「リリナ。頑張ろうね」

唐突にシルウィが口にした言葉に、リリナの動きが止まる。

「え——。う、うん」

「初めての实戦だけど、焦らずにいこうね」

「うん……。それ、さっき私が言った……」

「リリナのことは、私が守るから」

「わ……。私だつて!」

リリナは急ぎ込んで続ける。

「私だつて、シルウィ姉を守るわ!」

「ありがとう」

「うん……」

「——」

「——」

二人はしばしの間無言で抱き合う。

先に体を離れたのはシルウィだった。

「行こっか。目標はだいぶん弱ってる。もうすぐそこだ」

「ええ」

リリナは頷く。

二人は地を蹴ると、それまでとは比べ物にならないスピードで森の中を駆けていく。

足跡には血が垂れていた。

これ以上ない目印に、二人は迷うことなく森の奥深くへと分け入っていく。

※ ※

そうして、シルウィとリリナは、森の中層で一人の男を追い詰めた。

木々がうつそうと生い茂る中、男はひととき大きな木の陰に隠れて二人を窺っているようだった。

リリナがロングソードを鞘から抜き放つて前衛に出る。

シルウィは木の陰に隠れる男に油断なく白銀色の弓を向けた。

エルフの技術の粋が集められた弓は、狙いをつければ寸分たがわず目標に命中する。木の陰から出てくれば次の瞬間には頭を矢で撃ち抜ける。

「大人しくそこから出てきなよ！」

キリリと弦を軋ませながらシルウィは大きな声で言い放った。

彼女は続けて叫ぶ。

「抵抗しないなら身柄を拘束して村まで連れていけるけど、抵抗するならここで君を殺さなくちゃいけない」

村に引つ立てたところで村長の娘を攫った者の末路は石打ちだろうが、そこはあえて伏せる。

リリナが威嚇するようにブンとロングソードを振るつた。

「村まで」連れていく、だど？」

一拍置いて深いテノールが返ってきた。

黒龍王国の訛りのある帝国語だ——シルウィはそう思った。

しかし、訛りがあること自体は不思議ではない。

ここは白龍帝国の中でも黒龍王国との境界線に位置するエリアだ。たびたび割譲かつじょうしたり割譲されたりを繰り返しているので両国の人間が入り混じっており、男のように訛りのある人間も珍しくないのだ。

「そうだよ！ 誘拐したことを村長に謝ればきつと許してもらえる！ 攫った娘さんをどこに隠したか教え



てよ！ 教えてくれたら私たちも君を弁護してあげるから！」

「……ではお前たちは、村長に雇われて僕を捕らえに来たのか？」

「え……？ それは、そうだけど……？」

男の質問の意図が分からずシルウィは首を傾げる。

村の娘が攫われたから村長が冒険者である二人にクエストを発注したのだ。娘を取り返し、下手人の身柄を押さえて来い。

人違いということはあるまい。

森の中に人が住んでいるという情報は受けていない。足跡だって正確に辿ってきたはずだ。

途中不自然に途切れていた部分はあったが、探索したらまた同じ足跡が続いていた。少なくとも眼前の男が下手人であることは間違いない。

「シルウィ姉、あまり会話を続けないほうがいいわ」  
リリナが前方に油断なく構えたまま小声で呼びかけてくる。

シルウィは頷いた。

敵は魔術師のローブを着ていたという。セオリーでは、魔術師と戦うときは喋らせてはいけないのだ。剣士が剣を武器とするように魔術師は言葉を武器にするから。

案の定、男はどう考えても罠としか思えないことを口にし始めた。

「見逃してはくれまいか。攫った女はもう解放してあるし、ここでお前たちと戦う意思もない。村長に示しがつかぬというのなら、首は無理だが髪の毛を差し出そう。それをもって僕を討伐したことにしてもらいたい」

「……娘さんは生きてるの？」

「シルウィ姉！」

リリナが鋭く呼びかける。

彼女は敵の言葉を鵜呑みにしてはいけないと激しく首を振った。

もちろんシルウィも男の言葉を信じて「はい、そうですか」と取引に応じるほどお人好しではない。しかし、どうにも男の声は必死のように聞こえて、嘘を言

## しじまの性愛

162

風呂を前にして服を脱がずにシルウィと身を寄せあう。

お互いの左手を肩に置き、右手は腿の横辺りでぎゅつと握りあつた。

「あむ。……んちゅ。……ちゅ、……ちゅ……ちゅばつ」

シルウィは目を閉じてキスに応じている。初恋の相手に捧げる初キス——そんな様相を呈していたが、彼女の初キスはとつくの昔にアールによって強奪されていた。

体はもはやビッチと言って差し支えなかったが、心はいまだに乙女のまま。そんなアンバランスさを表すような口づけに、アールは股間の一物をさらに巨大化させた。

「ちゅつ、ちゅつ、んはあ、ちゅつ。——ね、ねえ……。ここ。またおつきくなってるよ……」

「シルウィがエロいからだ。クク、もつとエッチなお前を見せてくれ」

「やだ、見ないで。……ちゅつ。んちゅつ、ふーつ、ちゅつ、ちゅばつ、ちゅうつ、んふーつ、ちゅつ、ちゅつ、ちゅうつ……」

シルウィは、ますます体を寄せる。

繋いでいた右手と肩に置いていた左手をアールの首の後ろに回し、さらに密着する。胸がむにゅつと潰れた。アールの口の中にシルウィの舌が入り込んでくる。

「ちゅつ、ちゅばつ。ちゅつ、ちゅるるるるるつ、んふうつ、んつ、んんつ、ちゅつ、ちゅううううつ」

アールは両手をシルウィのスカートの中に差し入れ尻を揉んだ。張りのある肉がもにゅもにゅと手の平の中で形を変える。シルウィが「んふつ」と息を漏らし、蕩けた顔になった。

「おいおい、もつと嫌そうな顔をしろよ。さつきまではいい感じにつんつんしていたのに豹変しすぎだらう？」

「う、うるさいなあ……つ」



てこと？」

ためらうような、答えを訊くのを恐れているような——そんな問い。シルウィは瞳の奥に諦めの色を滲ませていた。性欲処理係でも自分は別に構わないと。

それに、アールは迷いなく言葉を返した。

「お前は僕の女だ」

シルウィは目を見開いた。

「——う、うれしい、かも」

「お前こそどうなのだ？ 僕のような外道のどこに惚れる要素があった？」

「ないね。アール君最低の変態野郎だもん。女の子にモテないのも分かるよ。——だからたぶん、私は君のおちんぼに惚れたんだと思う」

「なんだって？」

「だから、おちんぼ。私、アール君のおちんぼ大好きなの」

「ふっ、とんだ淫乱エルフだ」

アールがそう言うときシルウィは翠緑の目を妖しく光らせた。

「ふふ……。ねえ、服脱ごうよ。お風呂、一緒に入る？」

是非もない——とアールは引き千切るような勢いで服を脱ぎ捨てた。一方シルウィは一枚一枚丁寧に脱いでいく。

服のボタンを外し、乳首の屹立する大きな胸を露わにして。

腰のベルトを外し、すんとスカートを足首に落として。

アールの粘つくような視線にちらちらと時折顔を上げながら、愛液に溢れた白いショーツを片足を上げて抜き取る。

クロッチの部分には透명한糸が何本も引いていた。

シルウィはパンティを丁寧に畳んで置くと——「きやつ」とはしゃぐような声を上げてアールの体に飛びついた。

「おいおい……。どうしたんだ？」

「わかんないっ、はあっ、すぐく、すぐくエッチな気分なのっ。——んちゅっ」

シルウィはアールの体を押し浴槽まで誘導する。

「シルウィ、桶と石鹸はそこにある」

「せ、石鹸……!? わ、本当だ。こんな高価なものどこで手に入れたの!?!」

「錬成した。固まらせるのにお前の持っていた塩も使ったがな。カリウム石鹸だから一応もう使えるはずだ」  
「す、すごいねー。アール君はいろんなことができるんだ。……あ。じゃあー、私がアール君の体洗ったげるね」

「タオルはそこだ」

「要らないよ」

「なんだと?」

シルウィはアールの耳を唇に挟んだ。

「ねえ、アール君……。寝っ転がって」

「あ、ああ……」

「ふふっ、いい子だね」

シルウィはアールの陰毛の上に腰を下ろすと桶で湯を掬って体を流した。ちよろちよろと垂らすように自身の体とアールの体を濡らしている。右手で桶を動かしながら、彼女は左手でアールの大胸筋を撫でまわし

ていた。

「すごく……硬いね……」

「それなりに鍛えているつもりだからな」

「かっこいい」

シルウィは妖艶に笑うと石鹸を自らの体に擦りつけ始める。大きな胸をぶるぶると揺らしながら白い泡を大量に作り出していく。

そして――、

「えい」

声を弾ませて抱きついてきた。張りのある、ぬめぬめの柔らかい乳肉の感触。それが胸板にいやというほど密着してくる。

「うおお、これは……っ」

「ふふっ、一緒にきれいきれいしようね」

風呂場にハーブのいい香りが満ちる。

シルウィはヌチヨヌチヨと卑猥な音を立てながらアールの体を清めていく。

泡が足りなくなったら石鹸を自分の体に擦りつけて補充。

補充が終わったら石鹼を放り出してアールの背中に腕を回し、がむしゃらに体をなすりつける。

又チョツ、又チョツ、グチュ、グチュと卑猥な音を立てながらエルフの柔らかい肉が溶けるように体に合わさった。

「んっ、んっ、んうっ、んっ、ねえっ、ど、どう？  
気持ちいい？ んっ、んっ、んはあっ、んんっ、痛かったら言ってね」

「あああっ、柔らかくて気持ちいいぞっ、ぬちよぬちよのぐちやぐちやで、シルウィと合体してしまつたみたいだっ！」

「おちんぼも一緒に洗ったげるからね」

彼女ははむはむと耳を甘噛みしながらそう吹き込んでくる。次の瞬間、アールはぬめぬめの細い指が肉棒ににゅるりと絡みつくのを感じて思わず腰を浮かせた。

「おおっ」

「気持ちいい？ はあっ、わ、私も気持ちいいよっ  
おっはいの先擦れてっ。はあっ。も、もっとごしごししてあげるっ」

シルウィの五本の指がカリの部分をくりくりと撫でてくる。続いて鈴口を手の平で強く押すようににゅるにゅると。手の平はさらにスライドして竿を大きくしごき始める。

アールは彼女の背中に手を回した。腕に力を込めるとシルウィの温かい体がぬるぬると腹の上で横にスライドした。

「んああっ。あ、アール君、く、クリ擦れちゃうよおっ！ んちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、んふう、ちゅ、ぢゅううっ」

彼女の抗議を口でふさいで止める。

舌を濃密に絡ませあいながら体もどろどろに密着させる。二人でウナギがのたくるように体をくねらせる。シルウィのくぐもつた嬌声が口内を通じて直接脳に響いてくる。

アールはシルウィの膣穴に人差し指と中指を突っ込んだ。

「んぶっ、んもおっ!!」

口内でシルウィが叫ぶ。しかし吸い付くアールの口

が許さない。

「んもおお！ おおおお！ んふ——っ、んふううっ、んおおおおっ」

浅く小刻みに抉る。イかせないように。

シルウィは鼻で荒い息をしながらベニスをしごく手を早めた。

「んんーっ！ んふうううっ……！」

シルウィが瞳に涙を滲ませて首を振る。彼女はチンポの根元を掴むとぐちよぐちよの膣穴に一気に挿し入れた。

「んふうううううっ!?!」

シルウィが気をやる。

膣穴はいやらしく蠢きながら赤黒い剛直をずっぷりと呑み込んだ。肉棒の到来に喜ぶようにクチュクチュと甘噛みしている。

アールはシルウィごと体を起こすと、対面座位の形になりながら、彼女を強く抱きしめて腰を振った。性器のみならず体全体が粘性の高い淫らな音を奏でる。

青年はエルフの乙女の尻穴に小指を突っ込んだ。

シルウィは声にならない声をアールの口の中に響かせた。アールはシルウィの鼻息の臭いを鼻いっばいに吸い込みながら大きく下から陰茎を突き入れた。

ずちゆうううッとシルウィの子宮口を強く圧迫する。

「んお、お、お、おっ………!!!!」

シルウィがぶるぶると体を痙攣させた。

そして——、くたりと体の力が抜ける。

「ぶはっ。おいおい、僕はまだイっていないというのに自分だけイってしまったのか？」

「はあーっ、ご、ごめっ………。きもひ、はっ、よふぎへ……」

「早漏クリチンポだな。どれ、しごいてやろう」

「や、やめっ！ ああんっ」

胡坐をかいて座り込むシルウィの股間に手を伸ばす。びんびんに勃起した、ずる剥けのクリトリスを親指と中指でシコシコと揺する。人差し指はクリの頭を一定の速度で撫でまわす。

「あっ、あっ、あっ、あんっ、んああっ、あっ、ああっ、あ……っ」

白い膿液がピンクの肉の作る黒い肉穴からとろとろと流れ出るのが分かる。

シルウィは腫を半分上に向けながら顎を突き出して荒い息を繰り返していた。彼女の右手をアールの肉棒に絡みつきシコシコと上下に刺激を加え始める。

クリをひねり上げるとシルウィは首を振ってアールに飛びかかった。石鹸に濡れた体をアールに押しつけながらぬるりと背中に戻り込む。

「だ、だめっ。私が、アール君を気持ちよくさせるんだからっ」

背中に豊満な乳袋の感触。

乳と乳の間にはぬるぬるとした固形物——石鹸が挟んであるようだ。

あれよあれよと言う間に乳肉が上下に大きく動き始めるのを感じる。

シルウィはアールを後ろから抱きしめながら彼の広い背中を揉み洗いてくれているのだ。

青年の腰に彼女の長い足が巻き付いた。尻にはシルウィの濡れた陰毛の感触。

背中にはむにむにと押し付けられる乳の感触。

勃起した乳首が肌に擦れるのが分かる。彼女は獣のように荒い息を耳元で吐き出していた。息に甘い発情の香りが豊潤に混ざり始める。

「はむ」

耳が粘膜に包まれる感触。

続いて鼓膜を襲うびちゃびちゃという音——耳を舐められている！

シルウィが唇で甘噛みしながら、耳の後ろ、耳たぶ、耳の溝の一つ一つをちろちろと舌先でくすぐってくる。溝を舐め終わると舌を細くして耳穴を抉るようにほじほじと。

「ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ……んはあ……。おちんぼっ、おちんぼしごいてあげるねっ」

シルウィの手がまたベニスに絡まる。耳をベチャペチャと舐めながら上下に優しく肉棒が擦られる。

「タマを左手で揉めっ、下から持ち上げるようにっ」

「は、はむっ。んちゅ、ちゅ、ちゅ……っ」  
陰囊を左手でやわやわと揉まれる。体から力が抜け

ていく感覚に陥る。陰茎を握る右手は強めの握力だ。ふうー、ふうーという荒い鼻息とピチャピチャと耳を舐める音が脳の動きを蹂躪した。

アールは腰の筋肉に濡れた肉が押し付けられるのを感じた。シルウイの膣だ。

悩ましげに動く腕と足しか見えないが、彼女がクリトリスとマ○コを押し当てて気持ちよくなっているのは明らかだった。

「あんっ、一緒に気持ちよくなるうね。こうやって、こしこしこし」

親指でカリをくりくりとマッサージされる。四本の指は強く締められ、時に揉んだり、時にくすぐつたりを繰り返しながら射精を強く促してきた。

胸は相変わらず密着してヌチョヌチョといやらしくスライドしていた。耳舐めも垢を擦り落とすような、こなれた動きになり始めている。

腰に当たる彼女の女の部分は肌に吸い付くようだ。シルウイの鼻息が徐々に余裕を失くしたものになっ

てきた。

全身が彼女の甘い匂いに包まれている。

親指が裏筋を撫で上げ、鈴口を押し広げる。鋭角な刺激のあと、玉袋が大きく揉まれた。ペニスの根元に精液が溜まる。それを四本の冷たくしなやかな指が導くように上に向けてさすった。

「くっ……。出るぞ！」

「んちゅっ、はあっ。わ、私もっ、いきそっ。んんんっ」

びゅる、びゅるるるるる！ びゅくびゅくびゅくびゅくっ！！

白い液が迸る。液はシルウイの両手をしとどに濡らした。彼女はアールの肩に顎を乗せて、はあはあと荒い息を吐いている。

「ふう。なかなかのお手前だったぞ」

「そう……？ よかったあ」

シルウイは精液でどろどろになった手で尖った耳を搔いた。髪にジェル状の白濁液がねつとりと絡みつく。「ああ、こら。せっかくの綺麗な髪が汚れるだろうが。

まつたく……」

言つてアールは桶で湯を掬うと、足を崩してへたり込むシルウィを丁寧洗い清めていく。

「んふふー」

「なんだ、その顔は」

「んーん。なんでもないよ。ただ……、アール君の手が優しいなつて思つて」

「女性を乱雑に扱うわけにはいかない。セックスに付き合つてもらえる以上、きつちり気持ちよくなつてもらつてアフターケアまでさせてもらう」

「あははっ、なにそれ。男娼さんみたい」

「僕のようなブ男はそれくらいしないと相手が見つからないのだ」

アールはよく泡立てた布でシルウィの体を丁寧に擦りながら憂鬱そうに顔をしかめた。

シルウィは首を後ろに向けた。

「本当に王国では相手に困つてたの？ 嘘だと思つてただ」

「………本当だ」

「ふうん？ じゃあ、溜まつたときはどうしてたの？」

「腋の下洗うぞ」

「あー！ 誤魔化したっ！」

「うるさいな。そんなの決まつているだろう。自分で処理していた」

「娼館は利用していなかったんだ？」

「いや、付き合ひでたまに……」

「そっか」

シルウィはそれで会話を切り上げ、鼻歌を歌い始めた。

故郷で習つた歌なのか、アールには未知のものがだが美しい旋律だった。彼女の歌声は高く澄んでいて感情に溢れている。聴く者に歌い手と同じ情景を想像させる——密やかな魔力に満ちていた。

「髪はどうする？ 自分で洗うか？」

「アール君に洗つてもらおう！」

シルウィは三つ編みを解きながらにつこりと笑う。

アールはまた無言で洗い始めた。石鹸の泡で揉むように手を動かす。シルウィは岩の地面にべたんと座つ

たまま、両手を股の間について気持ちよさそうに目を細めている。アールがシャカシャカともみあげを洗ってやると、彼女はコロコロとくすぐったそうに笑い声を上げた。

「流すぞ。木の実で作ったリンスもあるからちよつと待て」

「うん。はあ……、髪を他人に洗われるのがこんなに気持ちいいと感じるなんてねー。リリナには、髪洗うときくらいは一人にしてほしいって毎回言ってたくらいなんだけど」

「意外だな。お前たちはもつと仲がいいのかと思った」  
「ああ、確かに普段のスキンシップは多いかもね。でも水浴びのときに髪を洗われるのはあんまり好きじゃなくてさ……」

変な話だよねーとシルウィは苦笑する。

憐れリリナ——アールは心の中で彼女に同情しながら金の髪にリンスを塗り込んでいく。リリナにしてみればいつもべつたりな姉貴分が、髪を洗うときだけ急に冷たくなったように感じていることだろう。実はこ

つそり傷ついているのではあるまいか。

しばらくして髪の手入れが終わった。

甘酸っぱい香りが浴場に満ち始めたところで、今度はシルウィが立ち上がった。

「もう動いて大丈夫なのか？」

「うん。次は私がアール君の髪を洗うね」

彼女はそう言つて金の髪を手早く後ろに束ねポニーテールを作った。彼女の細い首筋が露わになる。一回抜いていなければ危うく勃起するところだった。

シルウィに髪を洗ってもらい——。

そのあと仲良く二人で浴槽に浸かった。

縦長の長方形の浴槽の中で向かい合つて座る。

アールは股を広げ両腕を浴槽の縁に乗せて。

シルウィは体育座りをして太腿の裏を両腕で抱え持つて。

彼女は膝をぴっちりとか合わせ、両足首を広げて内股になるように足を折り曲げていた。

夜目の利くアールには、彼女の脛と脛の隙間から股間の部分がよく見えた。閉じられた太腿の間から金色

の剛毛が漏れ出て水に揺れている。クリトリスは見えなかったが、彼女の膣口付近の毛は刈りそろえられているので閉じられた膣肉の様子が手に取るように分かった。

アールがシルウイの股間を視姦していると、シルウイは視線に気が付いて頬を染めた。

「わ、私のおま〇こに興味あるんだ？」

「そ、そっか……」

「シルウイ」

「なに？」

「腕や足など細かいところにまだ汚れが残っている。もう一度僕の体を洗え」

「ん。いいよ。じゃあ布取ってくるね」

「待て。――布じゃなくておま〇こで洗え」

「え――」

シルウイは一瞬硬直したあと、

「う、うん……。分かった」

期待に満ち溢れた、淫らな笑みを浮かべた。

※ ※

「ん……、ん……、だいぶん泡立ってきたかな？  
んっ、それじゃ、そろそろ洗うね」

シルウイが石鹸で両手と股間を泡まみれにしながら微笑む。暗い中で彼女の翠緑の目は欲望に濡れ光っていた。

アールは岩の上に大股開きで腰を下ろしてふんぞり返って彼女を待っていた。

エルフの少女がつま先立ちでそんな彼の股の間にしゃがみ込む。彼女の膝頭は大きく広げられ、飛び出た陰毛やクリトリスが丸見えだ。

彼女はウンコ座りに似た卑猥なポーズを維持したまま、大きな胸で肉棒を挟み股間に密着した。

アールは少女の白い顎を持ち上げ、唇を奪った。

じゅるじゅると舌と涎を互いの口内に送り込むディープキス。

その間に彼女は挟み込んだ肉棒を胸で丁寧洗って

いく。

泡立つた手を腰に回し、男の硬い尻の皮や遅しい太腿の裏、膝裏から足の指の間まで隈なく手を走らせる。

「ぢゅ、ぢゅるっ、ぢゅるる、んはあ、れるお……はむ、ぢゅる、ぢゅぱっ」

肉棒を挟み込んだ乳肉に両手が当てられる。むにむにと大きな胸が形を変え、間に挟み込んだグロテスクな剛直は先が見えたり見えなくなったりした。

「ぶは、クク、ずいぶん機嫌のいいキスじゃないか。最初の可愛らしい口づけはどうした？」

「んー？ んふふ……。ぢゅっ、ぢゅぱっ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、ぢゅ、んふう、ぢゅううう、ぢゅぱっ、ぢゅぱっ、ぢゅうううっ」

激しくキスを繰り返しながらシルウィが太腿の上に乗る。

そして――、泡にまみれた恥毛をブラシ代わりに肌を磨き始めた。

「ぢゅ、ぢゅ……。どう？ んっ、チクチクしない？ 気持ち悪かったらすぐ言ってね」

ジョリジョリと腿の垢を削り落としながらシルウィが淡い笑みを浮かべる。彼女は腰をうねらせ、腹の肉を盛り上げらせたり引つ込ませたりしている。うっすらと割れた腹筋に水とも汗とも判断がつかない雫が付着していた。

「あんっ、ご、ごめんっ、クリが擦れて、おま○この入り口もぐにぐにされて、お汁、混ざっちゃう」

「汚れは石鹸が包み込んで新たな石鹸となる。気にするな」

「ひ、ひどっ、んっ。それじゃ、私のおま○こが汚れてべとべとみたい。んっ」

「いいから腰を動かせ。腿が済めば膣だ。その後は足の指先だ。早く洗わねば体が冷えてしまうぞ」

「んっ、はあい……」

シルウィの股の下は火傷しそうなほど熱い。それに明らかに石鹸とは違う粘性の高い液体が糸を引きまくっている。

足の先を洗うとき、指先で割れ目を弄つてやるとすぐに気をやった。びくびくと震えながら彼女は反対の

腿に乗る。そして同じように洗っていく。

「んあつ、こす、こすれるう……。クリ、つぶれて、あんつ、おま〇このひだ、めくれて、んああ」

終わつたら右腕だ。右肩を挟み込むときにお尻を向ける。エルフの染み一つない尻がアールの眼前でダイナミックにグラインドする。石鹸の泡からはハーブの香りが消えてシルウィイの愛液の臭いになっている。淫らな雌の香りだ。彼女はそこに気付かず一人心不乱に腰を振り続けている。

「んおつ、腕の筋肉、きもちいい。かたくて、ごりごり、してる、はあああ……」

舌を出しただらしないエルフの横顔。

太腿は腕をしごくようにぎゅうぎゅうにしまつてい

る。  
アールは右手の中指と人差し指を細かく動かし始めた。

シルウィイは素早く前後する太い指にごくりと喉を震わせた。

「はあつ——、指、速い……。はあつ、はあ……つ、

じゃあ、洗う、ね。指」

そして彼女は洗っていた腕から股間をスライドさせて、ゆつくりとアールの手の平に割れ目を押し付け、クリトリスを太い指に——。

「ん、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ！ お、おとおおお！ だ、だめ、だめつ。あつ、くつ、はあつ、ああああんつ！」

クリ弄を親指の腹に。

人差し指と中指で膣穴を掻き混ぜる。

「はあああああつ！ かきませ、ないでえええつ、ひつ、くうつ……」

唐突な絶頂。

びくつ、びくつと白い尻を震わせている。

なおも指でクリトリスを優しくくりくりと弄つてやると、彼女は両手で指をクリに押さえつけてきた。

彼女の重ねられた白い両手の下で、太く骨ばった指がぐりぐりと動く。びんびんに勃起したクリの密着しごきにシルウィイは自分から腰を押し付け続ける。

「あ~~~~」

「いつまでイっているつもりだ。淫乱女」

「あひつ、ご……、ごめ、なしゃつ。……んつ……しよ……」

今度は左肩。

左肩はシルウイの花びらのほうがアールの顔に向けられる形で擦られた。

赤くなつて飛び出たクリトリスが鼻先に触れるか触れまいかというところまで近づき、また遠ざかつていく。もはや石鹸はどこにも残っていない……。

アールが太い舌を突き出してやると、シルウイはそこにクリトリスをぶつける。

「クリ、クリッ」

「クリチンポッ」

「クリチンポッ！ クリチンポッ、きもち、いいつ、おつ、おおつ、ひつ！」

肩の筋肉を柔らかな太腿がぎゅつと締め付ける。

二センチの巨大なずる剥けクリトリスがぐりりと硬い皮膚に押し付けられ潰れた。

「おつ……」

絶頂。

鼻の下を伸ばした、美少女とは思えない下品な顔だ。

「はあつ、はあつ……。な、流すね……」

タワシ洗いだけで合計四回以上イったシルウイが息も絶え絶えになりながら桶で湯を掬う。

「気持ちよかった？」

湯を流しながらシルウイが汗に濡れた顔で覗き込んでくる。額に張り付いた前髪を横に流しながら爽やかに微笑んでいる。長距離を走り終えたあのような邪気のない笑顔だったが、その実彼女は性的な刺激を求めたもじもじと太腿を擦り合わせていた。

「流し終わったところすまんが、まだ一か所残っている」

「ど、どこ？」

「チンポを洗え。お前のおマ○コでな」

「あ……」

シルウイは股間の一物を見て顔を赤くする。恥じらっている顔。

しかし——アールはシルウイが唇をぺろりと舐めあ

げたのを見逃さなかった。

彼女は従順に頷くと、大股開きで接合部を見せつけるようにベニスの上に跨った。

「んっ、はあああああ………」

鼻から抜けるようなため息。

長い耳はすっかり萎れて力なく垂れていた。快感に心底参っているらしい。

根元まで剛直を呑み込んだあと、しばらく項垂れて肩を震わせていた彼女だったが、すぐに大きく腰を振り始めた。

「んっ、んっ、んっ、んはっ、んおっ、んんっ！」

アールが後ろに手をつけて体を倒すと、彼女はのしかかるように両手で肩を掴み、バチュン、バチュンと豪快に腰を打ち付け始める。

「ずいぶんとかつつくじゃないかっ」

「はっ……、んはっ……、おま〇こ、擦れて、じんじんしてて。んはああっ、切なくてっ！」

バチュバチュバチュと腰の動きが速まる。アールの快感を考えていない、完全に自分が楽しむだけの動き

だ。ぶびっ、ぶばっ、と屁のような汚い音を立てながら彼女はそり立った肉棒でオナニーをする。

オナニーだ。

口を開けて、涎を垂らしながら、岩の上に乗った肉棒で自分の膣穴をほじって気持ちよくなっている。

「んお。いひっ。んお、お、お、お」

舌を突き出して大きな胸をぶると乱暴に揺らしながら。

アールも彼女の動きに合わせて下から腰を突き上げる。

バチュウウツ、バチュウウウツ、と一回一回が重みのある挿入。膣奥まで一気に貫かれる衝撃に、シルウイは目を上向かせてよがった。

完全なアへ顔。

彼女は誇り高いエルフであることを忘れて、獣のように腰を打ち付け続ける。尻の穴をひりだして、ほぼ四つん這いになって喉を反らせる。

「お、お、お、お!!」

アールを逆レイプするかなのような見た目。

「あひつ、お、おごお、あつ、んひつ」

そしていくときは奥まで思いつきり肉棒を沈ませて、背を丸め座禪。

「おつ、おつ、おつ……！」

アクメ顔でしばし恍惚となり――。

「お、お、お、お、お、お」

また腰を激しく打ち付け始める。

快楽以外のすべてを忘れ去っている様子だ。

「――つ♡――つ♡――つ♡」

次のアクメは無言。

歯を食いしばり、眉を上げて唇を震わせながらの絶頂。

そしてまた腰を無茶苦茶に振り始める。

「んお、お、お、お!!」

アールは無造作にクリトリスに手を伸ばすと指でぎゅつと握り潰した。

「あ♡」

宙を泳いでいたピンク色の舌がだらりと力なく垂れ下がる。

「マ〇コを締める。ほら！」

「あ、あひつ。はひ……♡」

「ちつ、相性がいいからまだよいものの、自分だけいき狂うとはとんだ雌豚エルフだな。『私は雌豚エルフです』って言ってみろ」

「いひつ、わ、わらひはつ、めしゅぶだつ、えりゅふ、でしゅつ、あひつ」

「どうぞ雌豚のおま〇こを使って気持ちよくなつてください」

「めしゅぶたのおま〇こ、きもひよくしてえつ」

そこには「私がアール君を気持ちよくするんだから」と健気にも言い張った少女の姿は飛既がない。完全に快楽に飲まれた卑猥な雌が、膣穴をくばくばと閉させながら肉棒を啜えているだけだった。

アールはシルウイを抱えると岩から跳び降り、岩の地面に押し倒すとマングリ返しに格好にさせた。

膣肉はむあつと白い蒸気を立たせ、泡立った愛液でぐちゃぐちゃになっている。巨大なずる剥けクリトリスが膣穴の開閉に連動してびくびくと震えていた。

下の菊門はよく見ると形が崩れている。どうやら最近尻穴でオナニーをすることを覚えたりらしい。

アールはマンダリ返ししたエルフの少女にのしかかると、ズブウウウと深くペニスを突き刺した。

「んおおおおお!!」

ぶび、ぶびいつ、ぶぼぼつ、ぶおつ、とマン屁を鳴らし、エルフの膣肉は剛直を受け入れる。

シルウィは舌を唇の端からだらしなく垂れさせて

「おつ、おつ、おつ……」と薄い反応を繰り返していた。

アールは彼女の可愛らしい舌を口に含むとちゅうちゅうとそれを吸った。同時に腰を強く振り始める。

シルウィが潮を噴く。

締めまりが悪くなったのでクリトリスをひねる。

膣肉が締まる。

また潮を噴く。

クリトリスをひねる。

「かひゅつ……、こひゅつ……、……………かふつ」

「うっ、出すぞっ、シルウィ！」

びゆる、びゆるるるる！ びゆるるるる！ びゅつ、びゅつ。

「ふはつ。——おつと気絶していたのか。少々やりすぎたな。性魔術起動【精神分析】」

シルウィの頭に手をかざす。体温や脈拍などを調整し、快楽に狂った思考を自然回復させる。ついでに治療魔術もかけておく。

数秒してシルウィの濁った翠緑の瞳に光彩が戻ってきた。

アールはシルウィの膣内から精液と愛液にまみれた肉棒を引き抜く。少し萎びたが、まだまだ元気なペニスだ。

「おひつ……。ア……ル君？」

「休んでいる暇はないぞ。ペニスをしゃぶれ」

「ん……、は、はひ」

シルウィは緩慢な動作で体を下にずらしていく。

そしてぐちゃぐちゃになって萎びているペニスを口に含んで舐り始めた。

「じゅ、じゅぼつ、じゅぼぼぼぼぼつ、れろお、ちゅ



ばちゅば、えろえろえろ……、はああむ。じゅぼ、じゅぼ、んぷう、ずちゅ、じゅぼぼぼ、じゅぶ、じゅぼ、じゅぼおっ」

「おおつ、吸い出されるっ！一回練習したただけなのにずいぶん上手いな」

「んぶ、んぶ、んぶ、ぶはっ、ぴちやぴちやぴちや……」

シルウィはペニスの先を細い舌先でちろちろと舐める。治癒魔術と性魔術でも絶頂の余韻だけは回復できない。彼女は何度も軽くいきながらチンポをいやらしくしゃぶっていた。

「じゅずずずずつ、じゅつ~~~~~~~~つ。んおつ。じゅずずずずつ」

「うおおおつ、また出る！」  
白濁液が音を立てて噴出される。

シルウィは頬いっぱい子種汁を受けると、それをゴク……、ゴク……、と嚥<sup>えん</sup>下<sup>か</sup>した。

「んはあ……。おちんぼ汁……。おいし……」  
エルフの淫らな乙女は、手に着いたザー汁までも綺

麗に舐め取って飲み込みながら、マ○コから黄色い液体をジョボジョボと漏らすのだった——。

※ ※

「ご、ごめんね、アール君」

激しい交わりを終えてから一時間後。

ようやく快楽から回復したシルウィが、アールの股の間——ペニスの横に頬をつけて再三の謝罪を述べた。

彼女が言葉を発するたびにアールの萎びたペニスに彼女の吐息が当たっていた。

「構わん。セックスを覚えてたの初心者なのだから気を失っても仕方がない。僕のセックスは娼婦も泣かせてしまうほどの激しいものだそうだからな。よく出禁にされていたものだ」

「で、でも……。私つてば途中で我を忘れて腰振っちゃつてた……」

「気持ちいいことを覚えてたら誰しも猿のようになるさ。オナニーの覚えててもそんなもんだっただろう？」



リリフィルナ・  
カリナリエンの章

## プロローグ

洞穴の中でうごうごとと蠢く虫の影――。

その圧倒的な不快感に、リリナは額に滲んだ汗を飛ばしながら目を覚ました。

「――っ。――はあつ、はあつ、はあつ。――はっ」

視界は闇一色。しかし淫魔の娘という闇に属する者である彼女には、周囲の状況が手に取るように分かった。

小さな半球形のシェルターの中。

左側には義姉であるシルウィが背を向けて眠っていた。インナーに包まれた華奢な背中が呼吸に合わせて深く、ゆっくりと上下している。

――よかった。夢だったのね。

リリナはほっと息を吐くと右側に立てかけてあった愛用のロングソードを手繰り寄せた。

持ち上げるときにわずかに高い音が鳴ったが、シルウィは目をびくりと動かしただけでまた深く呼吸を繰り返

り返し始めた。

どうやら起こさずに済んだようである。

言うようにしてシェルターから出ると、外は満天の星だった。

街道から少し外れた草原。

周囲に旅人のたき火はなく、人影らしい人影は見えない。

時折吹き抜ける夏の風に草の葉がサワサワと揺れている。

リリナはできるだけ気配を殺してシェルターの後ろに立っている細い木に目をやった。

枝の上には外套に身をくるんだ大きな影が一つ。影はリリナに気付いた様子もなく、死んでいるかのよう枝の上で少しも動かない。

――今夜もあそこで寝ているのね。

どうやればあのような細い枝の上で眠れるのかリリナには分からなかったが、つい二週間前に知り合ってから、彼は間違いない毎晩ああやって仮眠を取っていた。本当は自分たちがシェルターの中に入ったあとに

下に降りて寝ているのではないかと疑っていたが、こ  
うも証拠をまざまざと見せつけられては、いい加減信  
じざるを得ない。

あの男は間違ひなく獣の類だ。

そこで冒険者をしている者たちよりもよっぽど自  
然に落け込んでいる。

慣れたらできるようになると彼は言っていたが、仮  
にできるようになってもあんな眠り方はしたくない。

木の上で寝るなど獣のすることだ。

人の眠り方ではない。

——そんなふうには「人」ぶっている私は、これから  
獣みたいなことをしに行くのだけれど。

暗い気持ちでじくじくと疼く尻に手をやる。

弄りに弄りまくった尻は、インナーの上から一撫で

するだけでも身を震わせるようなむず痒さを背中伝  
える。昼間は気にならないのだが、日が暮れて夕食を

腹に入れたあたりからもうだめだった。

——お尻の穴がむずむずする。

中になにか入っている気がする。

痒い。

たくさん指で触りたい。

「——はあっ」

リリナは小さく首を振ると身をかがめて草原を横切  
り、木々の間に分け入ってその先の小川を目指した。

——触りたい触りたい触りたい触りたいっ！

ぐちゃぐちゃに弄りまわして、膣壁の裏側の筋肉を  
ゴリゴリと抉るように指で揉んで、腸液で濡れた人差  
し指と中指とをゆっくと引き抜いてまた思いつきり  
奥まで差し込みたい。

着物をひっくり返すように、お尻の穴の中身も一緒  
に出てきて——それが、すごく気持ちがいいのだ。

リリナは小川の横に跪くと、まごつく手で短パンと  
パンティを引き摺り下ろした。

パンティにはねつとりとした透明な液が付着してい  
た。

液体はリリナの女部分——膣から糸を引いて滴って  
いる。

間違いなくそれは愛液だった。

荒い息を繰り返しながら、左手を川の中に沈んだ石の上に落とす。パシャリと小さな音がして、水面に映った白い三日月に波紋が走った。……頬を上気させた自身の顔にも。

はしたない顔だ。

いつもはサイドテールに括っている髪がストレートに下ろされていて。

幼さが残るものの和風美人を体现したような顔立ちが、欲望にどろどろに溶けてしまっている。

烏の濡れ羽色の髪が艶やかに揺れ、彼女の桜色の薄い唇に口内から出てきた赤い舌がべろりと這った。

「——あんっ」

ずぼりと人差し指と中指とを尻の穴に突き差す。

沈ませるのは第一関節までだけだ。

浅く抉るように中の筋肉を揉みほぐす。

最初は引く掻くように無茶苦茶に掻きまわしていたが、それよりもこちらのほうが得られる快感が大きいことに気が付いた。

二週間前に虫に犯され、たくさんの卵を産んだそこ

はクリトリスよりも感度が増しているような気がした。オナニーなど今までしたことなかつたリリナだったが、ビッグ・モスキートの媚薬めいた麻痺毒に中てられて、尻の穴が信じられないくらい性の感帯に変貌を遂げていたのである。

「はあ——っ、はあ——。………んくっ、ふ——っ、ふ——っ、ふぐ……」

菊門の周囲をなぞるように指を動かしながら水に濡れた左手でパンティを掴み取り口の中に押し込む。生臭い雌の臭いが喉から鼻に抜け、リリナの脳内に理性が戻ってくる。

——情けない……っ。

じわりと目じりに涙が滲んだ。

——恥ずかしい……！

喉の奥から嗚咽が漏れ出てくる。

——こんな私が、大嫌い！

必死に理性にしがみつこうとする脳とは対照的に、淫魔の体はどんだん勝手に高まってゆく。

望んでいないのに、気持ちよくなかなかたらない

のに、ぴったりと閉じた膣穴から蜜が溢れ出し、手入れなどまったくされていけない陰毛をしとどに濡らしていく。

「んう……」

しかし自身の卑猥な肉体を否定すればするほど指は的確に括約筋を揉みしだしていく。

リリナの足は既に閉じられ、黒い陰毛の中からひよっこりと顔を出したクリトリスを両腿が挟んで押し潰していく。

肉の芽が小さく、おまけに皮をかぶってくれていたおかげであまり刺激はない。

リリナは手の平で口を押さえながら尻から指をゆっくりと引き抜いた。

「……っ。ん……」

下品な声は上げない。

もともと耐え忍ぶことは得意だ。快樂に顔を歪ませようとも蛮人のように吠えたけることは決してない。

「んはあ………。んっ！ んんっ！」

また尻の穴に指を入れる。入れたのは二本。やはり

先ほどと同じ人差し指と中指。

今度はそれに加えて親指の先で会陰を擦った。

昨夜は尻の穴を弄りながらクリも弄っていった。

その前の晩は膣穴でイこうとして失敗した。膣穴に指を入れてみたけれど、気持ちよさがよく分からなかったのだ。人差し指を突っ込んで、指の先が空洞っぽいところに出たのでそこで適当にぐにぐに動かしていたのだが、結局痛みを感じてやめた。

やはりクリトリスが一番気持ちいい。

その次が——この会陰。

膣穴と尻穴の間。

穴がなくて、繋がっているところ。

「んっ……。ん……。ふううううう……」

擦ったあとに、つっと爪先を当ててゆっくり一撫でする。くすぐったさを感じるこの行為は、癖になる刺激をリリナに与えてくれていた。

——ああ……、気持ちいい……。

いまやリリナのピンク色の尻の穴は、丸い硬貨が入ったように黒い穴が開き、膣穴から湧き出した白い本

気汁でべとべとになつていた。突つ込んだ二本の指を動かすたびにブブツ、ブプウとおならのような音が鳴る。

二本の指を広げる。

リリナが逆さの視点から覗き込むと、指は白い糸を引いてにちやりと尻穴の中を見せてくれていた。そこはピンク色の肉がびくびくと動いていて、内部は腸液とも愛液とも判別のつかない液体によつて指の間同様、幾筋もの糸を引いていた。

「んうっ」

ポコポコとお腹が鳴る。

慌てて尻穴から指を抜こうとして、失敗した。

ぶふうー……と。

今度こそ本物のおならが鳴ってしまう。

「————っ」

それで目が覚めた。

リリナはかっとなら顔に染め、四つん這いの姿勢から尻を地面に着ける——女の子座りになった。

尻穴からはひりひりした快感が依然として伝わって

くる。このひりつくようなこの快感は生傷によるものだ。リリナが尻から引き抜いた二本の指を見つめる。指には白い膿と赤い血が、愛液やら腸液やらに混じつて付いていた。

「ぐす……」

怖くなつて鼻を吸る。

目に浮かんだ涙が頬を伝つてぼろぼろと零れ落ちる。

——こんなの、シルウィ姉に言えないわ……

自分が尻穴を弄つて感じている不潔な女だということ。

魔獣に挿入されたときからずっと血と膿が止まらないこと。

怖いのに、止めないといけないのに、淫魔のこの体は明日も再び尻穴オナニーをするように求めている。

「ぐす……。恥ずかしい……」

——手を、洗わないと。

尻穴を触つた手で皆に触れるわけにはいかない。無論綺麗に洗つたからといって抵抗は当然あるので、食事の支度はシルウィに頼りっぱなしだった。リリナは

毎回薪拾いである。

彼女はのそのそと動きだすと、枯葉を集めて無言詠唱で炎を点けた。

奇妙な同行者に教えてもらった魔術だ。

飲み込みの早いリリナは、既に初級魔術のほとんどを無言詠唱でできるようになっていた。

もともと暗記は得意なのだ。

生来の生真面目さゆえ、天才肌のシルウイよりも安定して結果を出し続けられるのである。

もつとも、魔術に関しては才能に差があるのでいずれは追い越されるだろうが。

——シルウイ姉はいつもそうだ。

リリナはゆらゆらと立ち上る火柱を見つめながら、きゅつと膝を抱いた。

彼女はリリナが持つていないものをたくさん持つてゐるのだ。

それがすごく羨ましかった。

妬ましいと言つてしまつても過言ではない。

全部全部奪つてしまいたくなる。

優しくしてくれるシルウイから。

——私は最低だわ。

しばらくして枯葉が燃えて灰になったので、それを集めて手を洗う。

アルカリのせいで皮膚が溶けてがさがさになるかもしれないが、汚いよりは絶対がいい。リリナは時折嗚咽を漏らしながら、憑かれたように爪の間まで念入りに清めていった。

そこにいつもの彼女の姿——凜とした少女剣士の影は一切なかった。

「指を洗う前に下着を履いたらどうだ」

「!!」

不意に響いた深いテノールにリリナは驚いて顔を上げ、背後を振り返った。

三日月の光がぎりぎり届かない細い若木の隣、微妙に陰になったところに、とび色の髪の青年が寄りかかつて彼女を見ていた。彼のライトブルーの瞳が獲物を誘う光のようにちろちろと明滅している。

「アール、さん……」

「いかにも」

暗がりから男がひたひたと歩み出てくる。

リリナは絶望した。

——見られた……！

反射的に息を吸い込み、叫び声を上げようとした。

しかし——、それも素早く間合いを詰めた青年の大きな手によって遮られる。

リリナはもごもご口を動かしながら、彼を突き飛ばそうと腕を伸ばしかけ——そこで、自分の指が灰で汚れていることを思い出し、動作を中断させた。

その間にアールはリリナを抱きすくめ、その場に押し倒していた。

リリナの耳元に青年の熱い息が当たる。

「尻の穴を見せろ」

「——っ!? ふっ、ふぐううう!!」

——犯される。

そう思った。

自分がいかに男の劣情を誘う格好をしているか、鏡を見るまでもなく分かる。

ホットパンツもパンティも脱ぎ捨てて上のインナー一枚なのだ。

ペニスの付いている男なら襲わない手はないだろう。

リリナは恐怖すると同時に、わずかばかりの黒い感情も抱いていた。

——私を襲って、一緒に病気になっちゃえばいいわ。血膿が出ているのだ。異常がないはずがない。

二週間いろいろと世話になった男だが、リリナにとっては所詮世話になっただけの男だった。

もともとこのアールのことは野蠻人のように思えて嫌いだったのだ。

襲ってきた現時点で内心の評価はマイナスの値に逆戻りだ。

ずぼり——と。

太くてごつごつした指が一本尻の穴に入ってきた。

「あうん……っ」

それがちょうどよい硬さ加減で。

ちようどいい感じに直腸の壁をこりゅつと擦ってき

リリナは思わず背を反らした。

——無理やり犯されて感じるなんて……っ。

どこまで自分は節操がないのか。

「痛むか？」

無言で啜り泣くりリリナに低い声がかげられる。

声をかけられて分かったのだが、痛みはどういうわけか消えていた。

今まで膣を濡らしていた痛みによる快感は消え——、丁寧に直腸を揉む優しい快感だけがリリナを満たしていた。

「手を離すが、叫び声を上げるなよ」

アールの冷静な声に、どうやら自分は犯されているわけではないらしいとリリナは理解し、こくこくと数回頷いた。

「ぶはっ！ ……あの、アールさん、これは……っ」

「触診だ」

アールは事務的にそう答える。

実は注意深く彼の股間を観察すると大きく隆起していることが分かるのだが、リリナは今それどころでは

ないので当然気が付かない。

実際アールが触診していると言うのは紛れもない真実であった。

「え……、触診……？」

「そうだ」

しかしそこでリリナが身じろぎしたせいで、彼女の足とアールの股間が触れてしまった。

硬い一物に触れたことで、リリナの表情が氷点下のものになった。

アールは真面目な顔で言葉を続ける。

「治癒魔術をかけつつ、体に異常がないか調べている。お前の場合は二週間前に虫に犯されて腸内に産卵されているからな。見た感じ問題はなさそうだが、指を突っ込んでみないと分からないものは分からない——ぶっ!!」

リリナは言葉の途中で変態男を張り飛ばすとゴミを見る目を送りながら立ち上がった。

「最低」

吐き捨てるようにそう言う。

アールは頬に赤い手形を浮かび上がらせながら首を傾げた。

「まだ痛むか？」

「え……、それは」

痛まない。

アールの痛みどころか不快感も一切消えてしまっている。慌てて「む、むこうを向いていなさいよ、変態！」と叫び、アールが後ろを向いたところで恐る恐る患部に指を触れてみる。

切れ痔になっていたところがなくなっていた。

膿も血も指に付いていない。

「どうやら治ったようだな。虫の細胞も残っていないようだし、単なる弄りすぎだろう」

「あ……う……」

上手く言葉が出てこないリリナに、アールは立ち上がって背を向ける。

ぼーんと、革袋に入ったなにかが宙を舞ってリリナの両手の間に収まった。

中を調べてみると、たくさんの苔が入っていた。

「大便したあととはそれで尻を拭くようにしろ。インキユバスの娘なら放っておいても大丈夫かもしれないが、念のためだ」

「……………」

「苔がなくなったら言え。あと——ケツを弄りたくなくても僕に言え。天にも昇る気持ちにさせてやる」

——天にも昇る気持ちって、どんなのかしら？

と一瞬考えてしまうが、リリナは慌てて首を振ると叫んだ。

「け、結構よ！」

「そうか。僕は別に構わんのだが」

アールはそれだけ言うとそのくさと林の中に戻っていく。大方気まずいから先に帰って寝ていようという魂胆なのだろう。

気まずいのは私のほうよ——とリリナは暗い気持ちで革袋を見下ろす。

いつもきつちりしている自分の、これ以上にないくらい卑猥な一面をあの人に見せてしまった。

尻穴をずぼずぼして感じているところを見られてし

まった。

これが皇族なら、そのまま入水自殺コースだ。

リリナはもちろん自殺しないが。

「手、洗おう……」

彼女はぼつりと呟く。

灰をまた集めようと林のほうへ近寄り――。

そこで破廉恥男が寄りかかっていた木の下に、小さな酒瓶が置いてあることに気が付いた。

結構度数の高い酒だ。そう言えば五日前通った村でアールが購入していた。あのときはなんとも思わなかったが、今こうして酒瓶が置き去りにされているのを見ると、彼がリリナのために買った物なのだと理解できる。

――あいつは気に入らないけれど、貰えるものは貰っておこう。

そう思って瓶を取り上げる。

リリナは酒を手念入りに揉みこみ、ついでにもう一度灰で手を洗ってからシエルターに戻った。

シエルターの中は相変わらずひんやりしていて、少

しだけ変な臭いがした。

布をかぶって眠っているシルウィを見るとわずかに

耳が赤らんでいる。

おでこに触れてみたが熱はない。

どういうわけか額は汗ばんでいるようだが。

リリナは首を傾げると横になって布をかぶった。

――散々な夜だった。

目を閉じながらそう思う。

尻を自分で弄り始めた時点で羞恥心とかプライドとかは吹っ飛んでいたが、こうしていざ人に見つかるといろいろとくるものがある。

幸運だったのは、リリナの秘め事を目撃したのがシルウィではなく、あのヘタレ童貞だったことだ。

いや、彼は尊敬すべき黒龍卿のただけれど、彼女の中では少なくとも犯罪者予備軍のクソ野郎だった。

――明日からはアールって呼び捨てにしてやる。彼の扱いを心の中で一ランク下げて、リリナは疲労による眠気に身を任せるのだった。

## 施術

少年から渡された青い花は月影草という葉草だった。リリナがアールに聞いたところ、野山に詳しい者からすれば定番の整腸薬だという。

水の近くに群生しているらしく、実際少年が手折ったと思いき月影草の群生地もすぐに見つかった。

生では食べられないそうなので、帝都に着いてからありがたく使わせてもらうことにした。

その日は帝都の間近まで迫り、また街道から外れた草原で野宿することになった。

昼間は駆け足をしながらアールの魔術講義を聞き、日が暮れ始めて、寝床を作ってからシルウィと模擬戦形式で体を鍛えるという、いつもの一日。

だけどそんな日々も今日で終わりだ。

——明日からは、迷宮攻略に精を出す日々だ。

夜、寝る前に武器の手入れをしながらリリナは気を引き締めた。

当然、迷宮に潜れば魔獣との戦闘——命のやり取りが待っている。

失敗は自身の死を招く。

帝都に入る前に体は十分に休めておく必要があるだろう。

そういうわけで、リリナは食事のあと早めにシエルトーに潜り込んで横になった。

一緒に床に就いたシルウィはすぐに寝息を立て始め、リリナもそれにつられて意識を飛ばした。

しかし——、彼女が眠りに落ちた瞬間、またいつもの虫の夢が襲いかかってきた。

「——っ。はあっ……、はあっ……」

先日と同じく荒い息とともにリリナは目を覚ます。

——まただ。

またあの虫に卵を産み付けられる夢。

お尻がむずむずする。

なにかが中に入っているような気がして弄りたくて仕方がない。

淫魔の体も尻を弄る快感を想像して喜びに震えてい

るようだ。

リリナはおぞましい感覚と背筋を這い上がる快感に居ても立ってもいられなくなった。

「——っ」

そして今日もシエルターを抜け出す。

今夜は護身用のロングソードも持たずに。

木の上で眠っているアールの姿を確認することもなく、一目散に水場へと駆けていく。

今夜のキャンプ地には林がないので走ればすぐそこに土手があり川がある。

そこへ真つ直ぐ転がり込んでいく。

しかし、

「ほう。今夜も来たのか」

川原には先客がいた。

リリナは額に汗を滲ませながら眼前の人物を睨みつけた。

「アールさん……!!」

「いかにも」

柔らかな月光が照らす川原の土手の陰から、とび色

の髪の男が悠然と歩み出てきた。

※ ※

親の仇に出くわしたような少女の視線を、アールは悠然と受け流す。

——これはまた、ずいぶんと欲情しているようだ。

口の端をつりあげながら、眼前の悪魔の娘を観察する。

髪を解かずに床に就いたのか、艶やかな黒髪はサイドテールのまま。

ドテールのまま。

瞳は普段の凜とした印象を消して情欲に潤んでいて、薄い唇は半開きで荒い息を吐いている。

一方で全身からは明確な敵意が発せられている。

彼女は無言だが、近寄ったら殴り倒すとも言っているようだった。

アールは両手を広げた。

「勘違いするな。別に僕はお前の邪魔をしようというわけではない」

「じゃあ、寢床に戻りなさいよ」

「まあ待て。僕は別にそうしても構わないのだが、お前の悲惨な状態を慮ってこうして出張っているのだ」

「余計なお世話よ」

リリナは取り付く島もなく、ぴしやりとそう言う。

「では訊くが、明日帝都入りしてから今夜のような状態になったらどうするつもりだ？」

「——っ」

リリナはバツが悪そうに顔を背けた。

彼女とシルウィの所持金では上等な部屋には泊まれないから、自然トイレは備えつけのオマルにすることになる。

そのこと自体が問題ではなくて、少女の悩みは用を足すための個室がないということだった。

個室がない状況ではオナニーの場所は外に求めるしかない。

しかし、宿屋を抜け出したところで一人になれるようなところはそうそう見つからない。

まさか路地裏に入って一人で尻を弄るわけにはいく

まい。

そこらのごろつきにでも見られたらどうなるか分かったものではなかった。

アールは続けた。

「お前の体の不調は薬草を飲んでどうこうなるものではない。心の問題だ。大方、ビッグ・モスキートに連れ去られてから毎晩虫の夢を見ているのだろう。産卵された直腸になにか詰まっているのではないかと夜になるたびに憔悴しているのではないか？」

「——」

「僕はお前のその症状を治してやれるかもしれない」

「——!! ほ、本当なの!?!」

リリナが目を剥く。アールは頷いた。

「ああ、なにか入っているようで気になるのなら、いっそのこと中を綺麗に洗浄してしまえばよいのだ」

言って後ろに持っていた大きな革袋から注射器やらバケツやらを取り出す。リリナはそれを見てアールの意図を汲み取った。

「洗浄って……、か、洗腸する気!?!」

「嫌ならやめるか？」

リリナは鼻白んだように言葉を詰まらせた。しかしやがて唇を噛みしめながら言葉の口にする。

「……………。いいえ。こんな恥ずかしい体のままいるわけにはいかない。施術をお願いするわ」

「クク、お前のように冷静に損得を勘定できる女は好きだぞ。——そこに寝転べ」

言ってアールはリリナの背後を指さす。そこにはアールがいつも着ている外套が広げてあった。下には乾し草が敷いてある。

「夕食の準備のときいなくなっただと思っていたら、こんなものを作っていたのね」

「女性を石ころの地面に転がすわけにはいかないからな。乾し草にはあらかじめ熱風を通して殺虫してある。

気にせず身を任せるがいい」

「……仰向けに寝ればいいの？」

「いや、できれば四つん這いだ」

リリナは無言で外套の上に手をついた。

薄い桃色のタンクトップに包まれたBカップの胸が

申し訳程度に揺れる。

タンクトップの胸は彼女のくびれた腰に張り付いて体のラインを強調していた。

弓反りになってしている腰の曲線の手前には、意外とむっちりとした尻。

薄黄色のホットパンツに包まれたそこは、つんと高く掲げられている。

尻の下には白く細い脚が伸びている。

成長過程の少女らしいきゅっと引き締まった腿。

膝のところでは肉はなくなり、その下のふくらはぎでわずかに筋肉が膨らんでいる。

抱きしめて匂いを嗅げば、いい香りが鼻いっぱいに満ちてきそうな少女の体だ。

「ちよつと、なにしているのよ」

長いサイドテールを背中の方へ払いながら、リリナが無然とした声を上げた。

「いや、狙いをつけていただけだ。気にするな。それより施術内容を説明する。まず、お前のケツマ○コを採みほぐす」

「ケツマン……ッ。待ちなさいよ。そんな必要ないでしょう。普通にその注射器で液を入れるだけでいいじゃない」

「僕はそれでも構わないが、下手をして括約筋を切つてしまったら大変なことになるぞ。具体的に言うのと、そこらにクソを際限なく垂れ流すことになるな」

治癒魔術で治せばよいだけだが、あえてそれは言わない。

リリナは顔を歪めた。

括約筋を切られたら、治癒魔術でくつつけるとお願いまする羽目になることが分かっているのだ。

四つん這いになって大便を垂れ流しながらの懇願——尻穴を弄られることも大概だが、こちらは辺り一帯が本当に汚いことになる。

リリナは夕食の焼肉を食べ過ぎたことを今更のよう  
に後悔していた。しかし食べなければ強行軍で失った  
カロリーを補えなかつたのだ。仕方がないとも言える。

年頃の少女には非常に難しい選択だったが、  
「分かつたわよ……」

結局彼女は尻穴を揉みほぐしてもらうことを選んだ。

アールはにんまりと悪魔のような笑みを浮かべる。

「クク……。いいぞ。揉みほぐしたあとは、いよいよ  
浣腸液を注入する。この注射器で」

アールは極太の注入口の付いた注射器をリリナの目  
の前にかざす。

彼は続けた。

「そして注入する液体はこれだ」

彼が掲げたのは酒瓶に入った無色透明の液体だった。

リリナは眉根を寄せる。

「水……?」

「いや、違う。グリセリンだ」

「グリセリン」

「そうだ。こんなこともあるうかと石鹸を錬成する際  
についてに作っておいたのだ。こいつを注入されたら  
お前の腸は浸透圧により刺激され、蠕動運動蠕動を活発に  
開始する」

「浸透圧……昼間の魔術講義で習ったところだわ」

リリナが興味深そうにグリセリンを眺めている。怒

りや羞恥心が一時的に飛んでしまっているようだ。好奇心が強い彼女らしい反応だった。

「要するにお前の尻穴からクソがブリブリとひり出てくる葉だと理解しておけばいい」

「———っ」

アールの下品な物言いにリリナの羞恥心が戻ってくる。彼女は、かっとな頬を染めて俯いた。目を見開き、引き結んだ唇をふるふると震わせている。

「では脱がすぞ」

「え、ちょ、待って」

「なんだ？」

「ずらしたら、見えちゃうわ」

「なにが？」

「わ……、私の女の部分が」

「そうか。では見えないように布を被せて施術しよう」

おま○コと言わせてもよかったが、あんまりいじめすぎるとただの痴漢行為だと思われる。そうなれば尻の診察も終わりになる。越えていい線と悪い線の見極めは大切だ。

アールはポケットからハンカチを取り出すとリリナの尻に被せた。しかしハンカチは面積が足りないの彼女との股の間は丸見えのままである。もちろんそのことを親切に教えてやる気はなかった。

今度こそリリナの薄黄色のホットパンツを下のパンティごとずらす。

「ん……」

尻タブをアールの指が擦り、リリナはぎゅつと目を瞑った。

アールの視界にリリナの生の股間が大写しになった。白い大陰唇と黒い陰毛。

シルウイのもののように襲が露出し巨大なクリトリスが自己主張する淫らな秘所ではない。

尻穴の形こそ崩れて中の肉が盛り上がり飛び出ているが、それ以外の形や色は完璧だった。

ピンク色の菊門、細いI字のライン。

縦筋からは皮に包まれたクリトリスが少し漏れ出ていて、膣の部分はびつたりと閉じている。

周囲には手入れされていない黒い恥毛が全体的に生

えている。

少し盛りマン気味だろうか。

太腿によって寄せられた媚肉はぷにぷにと柔らかさうだ。

陰毛を刈り取れば美しいパイパンマ○コになることだろう。

アールは革袋からローションの入った小瓶を取り出すと指先に丹念に塗りつけていく。液を人肌に温めると、早速リリナの尻タブに触れた。

「……………っ。なに、このぬめぬめは!?!」

「潤滑剤だ。あまり大きな声を出すとシルウイが起きてしまうぞ」

「……………!」

リリナが口を嚙む。

アールは柔らかい尻タブに指をうずめるとゆっくと左右に割り開いた。

「うう……………」

リリナの口から泣きそうなうめき声が漏れ出る。

二週間の間乱暴に弄られまくった尻の穴は、くぱく

ぱと開いたり閉じたりしている。一度開閉するたびに直腸の中の空気が押し出されているように思えた。

アールが鼻を近づけると、もったりとした独特の香りが鼻を突いた。

一日走り回ってしつかり排泄もした不浄の穴。

シルウイのもののほど臭いは強くないが、リリナのものもなかなか熟成された臭いがした。

体臭があまりないリリナであるが、この部分だけは別のようだ。立派に鼻にくる臭いがする。

その下の膣穴はまったく濡れていない。いやらしさの欠片もない清純なるマ○コだ。

アールは雌穴には触れないように細心の注意を払いながら菊門に右手の人差し指を沈めていく。

浅く穴に突っ込んだところでリリナはびくりと身を震わせた。

入り口の肉をふにふにと揉んでいく。皺を伸ばしたり、内壁にぐによりと指の腹を沈ませたり、時にゆっくと引き抜いたり。

引き抜くときは内臓まで引き出すようにゆっくりね

つとりと指を動かす。

タンクトップの裾から露出した引き締まったお腹の白い肌がぞわりと粟立つのが見えた。

ローションを指に追加し、人差し指を出し入れする。又チョ……、又チャ……、という粘性の高い音がピンク色の肉穴から指が出入りするたびに響く。

細い腰の向こうで項垂れる少女の顔に目をやると、恐怖に耐えるように歯を食いしばっていた。

「痛いか？」

「う、ううん。痛くないわ……」

「どうして歯を食いしばっているのだ？」

「アールさんの指を汚しちゃうかもって……」

「便は付いていない。とても綺麗な尻穴だ」

「——んう……」

リリナの肩の力が抜ける。凝り固まっていた尻穴の肉がほんのわずかに緩んだ。

アールは人差し指の第二関節まで指を押し込み、直腸の内部の筋肉に大きく振動を与えていく。腰まで響くような刺激だ。

リリナは「ああ……」と気持ちよさそうな声を出し、慌てて指を噛んで淫らな鳴き声を抑え込んだ。

親指の腹で入り口を撫でさすりながら内部をぐりぐりと揉んでいく。リリナの直腸の筋肉を麻痺させるように、腰の骨をがくがくと揺らす。

リリナの膝が急に震え始めた。もっちりとした白く細い太腿が痙攣を始める。

デリケートゾーンを挟む、膨らんだ柔らかい内腿の肉に、彼女の蜜がねつとりと伝う。

「はっ……、は……、はあ……、あう……、はあっ……」

指を噛んでいたはずの薄桃色の唇は半開きになって涎に濡れている。

彼女の眉間の皺だけが理性の存在を訴えていた。

「腰の辺りが抜けるように気持ちがいいだろう？」

「んうううう……。んううううう……」

サイドテールが左右に揺れる。彼女が激しく首を振っているのだ。

人差し指に加えて中指も差し込む。

ニジイツと膨らんだアヌスから水気を含んだ空気が漏れる。

「ん……」

リリナがくぐもった声を漏らす。

いったわけではなく、強い刺激に対して背中が跳ねただけだ。

にゅほんつと二本の指を抜くと、リリナは腰から崩れ落ちて、筋肉の反射でびくびくと下に敷いた外套の上で尻を痙攣させた。

力なくだらりと開かれた両足。

その間の女性器からとろとろと愛蜜が垂れている。

アールはアヌスを揉んでいたのとは反対の手で膣全体をゆつくりと撫でさすった。皮下脂肪たっぷりの大陰唇がぐにぐにと蠢く。

「あ……。あつんう。あうう……」

リリナが虚ろな目をして喉を反らせる。気持ちよさそうに口角が上がっている。

しかし、それでも彼女は強い理性で快感の波から戻ってきたようだ。

アールは素早く膣から手を離れた。

酒で両手を洗い、解毒魔術をかける。一方で彼女の耳元で囁いた。

「よく解れた。もう大丈夫だ。浣腸を行うぞ」

わずかにリリナが身を固くするが、肩を強く揉んで無理やり力を抜かせる。

注射器にグリセリンを入れて、再度左手の指でリリナの尻タブを割り開く。足が半開きということもあって、特に苦勞なく内壁がめくれた卑猥なアヌスが露わになった。

くぱくぱと開閉するそこに、タイミングを見計らって極太の注入口を差し込む。

「あんっ」

リリナが高い声を上げた。

構わずピストンをゆつくり押し込む。内部のグリセリンがどんどん目減りしていき、リリナの薄い腹が少しずつ膨らんでいく。

「あう、つ、つめたっ……」

「大丈夫だ」

落ち着かせるように耳元で囁く。

リリナの頬がぞわりと粟立つ。菊蕾がぶるぶるとゼリーのように動いている。

「ああ……。んふううう……。」

リリナの力が抜けるようなため息。

ピストンをどんどん押ししていく。

すると、グリセリンを四分の一ほど残した辺りであり、リリナの額に汗が滲み始めた。

「あ、アールさつ……。ま、まだ……。つ？」

「まだだ。もうちよつとだ」

「んいいいい……」

リリナが菌を食いしぼる。鼻息はフーフーと荒い。

ギユルギユルギユルギユルと彼女の飛び出たお腹の辺りから大きな音が響く。しかし恥ずかしがる余裕もないくらいにリリナは苦痛に顔を歪めている。

湧き起こる排泄欲求に必死に耐えているのだ。

やがて注入を終えると、リリナが必死な声で懇願し始めた。

「と、トイレっ！ トイレに行かせて！」

「よかろう。ここにバケツがある。この中にしろ」

「えっ!?!」

リリナはアールが差し出したガラス製のバケツを見つめて目を白黒させる。尻穴に両手を当て、それを太腿で挟み込む格好でふらふらと立ち上がる。

「嫌ならそちらで野グソでもするか？」

「~~~~~っ！ か、貸して！」

引っ手繰るようにアールの手からバケツを受け取ると、彼女はバケツにびったりと尻肉を嵌める。そして申し訳程度に両手を前にやって股間部分を隠す。しかし面積が面積なのでほとんど隠れていない。

「む、むこう向いて！」

「だめだ。患者から目を離すわけにはいかない」

「そ、そんなつ……。ひうつ」

リリナの顔が歪む。

アールは目を離さない。

リリナが耐えるように、ぎゅっと目を瞑り……。それもすぐにへにやりと力の抜けた表情になる。排泄欲求にリリナの理性が敗北した瞬間だった。

断末魔の叫びのようにリリナは身をよじり、刹那

「ジョバババババババツッ！ ブツ、ブポオツ、ブウウウウウウ！！！ ブツ、ブウウウウウツッ！ ブピイイイイイツツツッ！！！！」

バシヤバシヤと液体がガラスの底を跳ねる音。

可愛らしい黒髪の美少女の豪快な排便。

リリナの菊門からは透明なグリセリンが吹き出し、一瞬つかえるように液体が止まったあと、大きな屁の音とともに拳大の茶色い固形物がガラスに発射された。

ブポボ、ブウ、ブウと昼の間溜めていた臭いおならが大便に混じって下品な音楽を奏でる。

リリナは羞恥に顔を染め、涙を零しながら排泄を続けた。ピンク色の小さかった蕾は、いまや直径四センチほどの黒穴を開けている。

「ひつく……。ぐす……。ひう……」

啜り泣きくりリリナを優しく抱きしめ、アールは汚れた尻穴とバケツの処理をした。

処理が終わると、外套の上で膝を抱えているリリナの肩を抱きしめる。

「よく頑張ったな。人前で排泄するなどという拷問に耐えきったお前は偉い。僕がこれまで見てきたどの女子よりもへぶツ!!」

「うっさい、死ね、変態！」

言葉の途中でリリナが頬を思いつき張り飛ばす。それを甘んじて受けたアールはもんどり打って後ろに倒れた。

リリナは真つ赤な目でアールを睨みつける。

「信じられない！ むこう向いてて言って言ったのに、ずっと見て！ほんと、最低！」

「しかし、見られて気持ちよくなるということもあるわけ——」

「あるか！ あんたやっぱり最低よ！ あんたなんか『アールさん』じゃなくて『アール』で十分だわ！ 変態！ 変態！ 最低！ 死ね！」

「素晴らしい罵声をありがとう。——しかし、これだけすっきり出して、なおも虫の卵が体内にあるとは到

底考えられまい。どうだ？ 虫の細胞は腹の中になかったという事実を客観的に受け入れることができないか？

「それは……」

リリナは細いお腹に手を当てる。

「これだけ気持ちよく出したのだから、卵なんてあるはずないわ。確かに——、私は今事実を客観的に受け入れている」

アールは、にっと笑みを浮かべた。第三者から見たら悪魔のような笑みだったが、彼にとっては最大限爽やかな笑みである。

「よかつたではないか」

「なにがいのよ、アホ」

リリナがアールに石を投げつける。アールはそれを手の平で受け止めると、素早くリリナに近寄って押し倒した。彼女は腰の力が抜けて立てない状態だ。為す術もなく組み伏せられる。

「……なによ、変態」

「いや、話にはまだ続きがあるということだ」

アールはそう言うときポケットからウズラの卵くらい大きさのビーズが数珠のように連なった棒状の玩具——アナルビーズをリリナに突きつけた。

「それは……？」

「アナルビーズだ。尻に入れて遊ぶ」

「——ぶっ!!」

「先端のビーズには魔法陣が描いてあり、魔力を込めることによって激しく振動させることが可能だ。震えるのは先端だけが、振動は根元まで細かに伝わる。

——このように」

アールが魔法陣に力を込める。途端、アナルビーズは激しく振動しながらうねうねとくねり始めた。

彼は続ける。

「性魔術で僕が錬成した至高の一品だ。——その名も、『アナルナーガ』！ 尻穴の龍という意味だ。僕は中途半端が嫌いだから、今日はこれでお前を最後まで導いてやる」

「や、やめつ——、ふぐうっ!!????」

素早くホットパンツとパンティを脱がされ、パンテ

イは口の中に突っ込まれる。

リリナは鼻に抜けるような自分の雌臭に、反射的に抵抗を弱めてしまった。

毎回のアナニー前にパンティを唾えることが常態化していたため、体が勝手に反応してしまったのである。

「――暴れるなよ」

ドスの利いた低い声。リリナが肩をびくりと震わせ、体の力を抜いた。

アールはアナルピースに薄いゴム膜——コンドームを穿かせる。

それにたつぷりとローションを塗りつけ、リリナの尻穴にあてがった。

「ひうっ」

少女の喉が震える。しかしそれも一瞬、直腸に差し入れられたアナルピースに細い腰が反り返った。アールは柔らかな乙女の体を強く抱きしめながら、アナルピースに弱く魔力を注ぐ。

「んっ……」

リリナが頬を染めて喉を反らす。

しかし赤面したのは羞恥によるものではなく、別のかなにかによるものが大きいようだ。

別のなにか——それは言うまでもない。

「ククク……。リリナ、お前は可愛いな」

アナルピースが駆動音を響かせてリリナの腸壁をゴリゴリと抉る。無造作に広げられた彼女のすらりとした足が笑い始めた。

アールは隆起した股間をリリナのクリトリスに押し当てた。

「んう……」

リリナの鼻から、はつきりと甘い声飛び出た。

アールは指を鳴らすと地中から土の腕を出現させリリナを拘束した。

身動きの取れない彼女を再び四つん這いに押さえつける。

その際手を離れたアナルピースだが、リリナの尻穴に刺さったまま卑猥にぐにぐにと円を描くように動き回っていた。

それに合わせてリリナの白い尻もくねくねと揺れて



To be continued——

外伝 逃亡の性魔術師

バシヤリと音を立てて、腐葉土から染み出た湧き水溜まりが弾けた。

「いた！ あそこよ！ 今度は絶対に逃がしちやだめ！」

整備された森の中にこだまする騒々しい馬蹄の響き。

地面に降り積もった枯葉を小刻みに揺らして、七組の馬の足が湧き水溜まりを踏みつけ通過していく。

朝露を乗せた木々の葉は振動に水滴を零し、派手に脈動する。

うっそうと茂る高い木の葉っぱの間から差し込む柔らかな木漏れ日は、巻き上げられた塵や土をきらきらと輝かせた。

黒龍王国西端、「死霊の森」。

おどろおどろしい名前とは裏腹に生命力の満ち溢れたその森は、今日に限っては早朝から騒がしかった。

木々が間引かれた森の通路には合計八つの影があっ

た。

一つは触手チンポの魔獣。

残り七つは馬とバイコーンの混ざり物に乗った重装備の騎士たちだった。

触手チンポの化け物には一人の青年が掴まっている。彼はこけた頬にざらざらと輝く落ちくぼんだ目をしている。髭も伸び放題で、肌の色つやもすこぶる悪かった。

対する七騎の追手は英気十分といった様子だ。

概ね漆黒の鎧に身を包んだ騎士たちは馬上で先行するチンポ魔獣を親の仇のように睨んでいた。

黒い重装備たちの先頭には、華やかな騎士の姿があった。

白と桃色を基調にした見目麗しい装飾の鎧。あちこちに薔薇の花の紋様が描かれている。背中には、これもまた薔薇の花が描かれた大盾を背負っていた。

「もう追跡の魔道具はないわよ！ これを振りきられたらもうあとがないんだから！」

先頭の美麗な騎士は女性のようだった。

手綱をしつかりと握り、背後の漆黒の六騎を振り返って元氣よく高い声を上げている。

歳は十代後半といったところか。

腰鎧や胸鎧の辺りに白いひらひらのフリルがたくさん付いていることから、ずいぶんと少女趣味であることが窺える。

彼女の鼓舞に、六騎の黒騎士たちは無言で返す。

別に女騎士に対して敵意を示しているわけではなく、ただ生来無口なだけといったふうである。

しかし無視されるほうとしては気分があがるものではないらしい。

女騎士は兜の奥の眉を下げ——、すぐに気を取り直して前方をきつと睨んだ。

「逃がさないんだから……っ！」

フェミニンな桃色の兜の奥で、彼女は低く呟く。

女騎士——レーカは兜の下で唇を引き結んだ。

——絶対に逃がさない。

「アール・ダークラットオオオオッ!!」

レーカの高い声が、木々の間に反射して、遠く大き

く伝播した。

※ ※

黒龍卿アール・ダークラットが他国に亡命しようとしていたのは昨晩のことだった。

詳細は書いてなかったが、どうやら彼は自身の魔術研究室を自ら爆破し、弟子に乱暴して姿をくらませたという。

王都周辺に急ぎ検問を張ったが、警備兵を制圧して逃げおせたとか。

行き先は分からないが、西の方向へ逃げたことから、素直に考えれば白龍帝国ではないだろうかと推測されているらしい。

黒龍卿を逃がしてはならない。軍の情報や彼自身の魔術知識を他国に渡してしまうのは絶対にいけないことだからだ。

国王以下大臣たちまでも血眼になって彼を追い——。

しかし、いまだに性魔術師は捕まっていない。

とは言え、三日三晩追い続けていることや追手を何人も撃退しているところから、彼はだいたいぶん衰弱していると思される。

黒龍卿を捕える者がいるとすれば、そなたしかいない。レーカ・グヤーシユ、頼んだぞ——国王直々にそのように下知されたとあつては張り切らざるをえない。

たとえ捕縛対象が大恩人であつたとしても、だ。

——プラスに考えるのよ、レーカ！　むしろ今こそ進化した私の力を彼に見せつけるときつ！

よく分らないけれど、アールが悪いことをしたのなら止めないといけない。

止めるということは、多少は彼と戦闘するということ。

なら、ちょうどいい機会だから、武芸の師匠にアツと言わせてやろう。

レーカはそう思っていた。

彼女の中に国王を疑うという考えはまったくなかつた。

考えるのがもともと苦手なのだ。

弟子に暴力を振るつた理由はなんだろうとか、そもそも彼は大事な性魔術の研究資料を放棄してまで国外へ逃亡するだろうかとか、誰もが少しは考えることでさえ彼女は思考できない。

——逃げているなら追わなきゃ！

手紙には難しい言葉でいろいろ書いてあつたけれど（彼女では読めない単語が結構あつて、簡単な文字で書かれているところだけ読んで意味を取つた）、要するにそういうことだろう。

アールは変態で馬鹿だ。

アホなことをしてお仕置きされるのが嫌で逃げているなら、捕まえて鉄拳制裁して一喝してやらなきゃならない。

とにかく、一時の迷いで黒龍王国を出ようとするのだけはやめさせないと——彼女は馬に鞭を振るいながらそう決意を固めるのだった。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル  
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、  
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**